

ソーラー・システムの長構造と重力の情報システムについて

The Long Range Structure in our Solar System and the Information System

林 大雅[†] 林 佐千男[†] 田中 敏幸[‡]
Hiromasa Hayashi[†] Sachio Hayashi[†] Toshiyuki Tanaka[‡]

[†]長構造研究会 研究開発グループ

[‡]慶応義塾大学 理工学部

[†] Long Range Structure Research Laboratory

[‡] School of Science and Engineering, Keio University

要旨

太陽系 (Solar System) における 太陽の自転と惑星の公転に関する共鳴関係、並びに、惑星の自転と衛星の公転に関する共鳴関係、等のフラクタル構造について、数理モデル (Virtual Hula-Hoop Mathematical Model) を提案する。次に、共鳴関係を長構造的に音楽情報にマッピングして協和音 (Concord) の存在を検証する。更に、逆問題としてのこの数理モデルを物理モデルに結び付ける為の、重力の情報システムについて考察する。

1. はじめに

太陽系の「太陽の自転と惑星の公転との関係」並びに「惑星の自転と衛星の公転との関係」の双方に当て嵌まる、音楽情報モデルと数理モデルを提案し、観測されたデータによりそれを検証したい。

但し、中心星の半径は、赤道半径Rを使用し、中心星の自転周期は、赤道付近の自転周期により計算している。第1近似値として、太陽の自転周期には、2538日 \approx 音階名 (A-26) を採用している。

2. 音楽情報 (音階) モデル の 参照

オーケストラの音取りに使われる『ラ』の音は、440Hz = (A4) で、NHKラジオ放送の時報にも1オクターブ (8度) 高い、880Hz = (A5) との組み合わせで、毎定時に使われている。

周期は周波数の逆数で、440Hz \approx 2.27ms である。この関係を低周波~長低周波に拡張して考える。

1 mHz : 1キロ秒 = 16分40秒 の 周期

周波数 1 kHz : 1ミリ秒 = 1ms の 周期

1 μ Hz : 1メガ秒 \approx 11.574日 の 周期

周波数 1 MHz : 1マイクロ秒 = 1 μ s の 周期

1 nHz : 1ギガ秒 \approx 31.688年 (約32年)

周波数 1 GHz : 1ナノ秒 = 1ns の 周期

1 pHz : 1テラ秒 \approx 31,688年 (約3万2千年)

周波数 1 THz : 1ピコ秒 = 1ps の 周期

太陽系の天体の自転周期や公転周期には、共鳴 (Resonance) 関係が多々見受けられ、音楽情報の協和音(Concord)の関係に相当している。それとは逆に半音階的な差異を持つ不協和音(Discord)の存在も多々見受けられるが、その存在の必然性についても検討して行きたい。

音階では、平均律でも純正調でも1オクターブ=8度、は2倍の周波数(1/2の周期)の関係にある。440Hz=A4, 220Hz=A3, 110Hz=A2, 55Hz=A1, 27.5Hz=A0, 更に、13.75Hz=A-1, ...と(-)マイナスのオクターブ関係により、低周波~長低周波にまで範囲を広げると、共鳴関係、協和音/不協和音、の検証が容易になる。

水星の自転周期G-27, と公転周期, C-27, は 2:3 (ドレミファソ:5度)の関係である。

太陽の自転周期A-26を基準にして太陽系の惑星や矮惑星の公転周期を音階名で表わした。

(表1) 音階名 と 自転 公転 周期 A-26は、440Hz=A4 から30オクターブ低い周波数に相当する。

(本論 においては、太陽の自転周期の2538日を基準の振動数の周期にしている。)

平均律は1オクターブを、12音に等比級数的に分割しているので、半音の差は約1.059倍である。

CとF#(全4度=3全音)の比は、平均律では、 $\sqrt{2} \approx 1.41421356$ である。純正調では、7:5としている。

純正調では尽数関係の様に簡単な整数比で表わされる音階である。平均律と純正調の差は1%程度ある事もある。

3. HH（フラフープ）数理モデルの提案

遊具のフラフープの回転運動をモデルとして、直感的に、自転振動している母星を人の体に当て嵌めて、仮想的なフラフープが、宇宙空間で母星の自転に同期して、回転しているものと想定する。

フラフープは太陽系の宇宙空間に実在してはいないが、この仮想フラフープの外縁は、母星の子星に接する程度の大きさを持っているものを想定している。

仮想フラフープの半径（H）は、直径は子星の公転軌道の長半径（K）の（1/2）程度である。表計算 StarCalc を使って理科年表と天文年鑑から太陽と惑星および惑星と衛星の下記のデータを表計算に入力して、色々と比較検討を試みた。

4. 変数と記号の説明（Y : X 並びに M : X に 共鳴関係がある）

太陽の自転周期；A；対恒星；単位：日数

太陽の自転周期；B；対惑星；単位：日数

太陽の赤道半径；R；Radius；単位：km

惑星の赤道半径；r；radius；単位：km

惑星の公転周期；Y；対恒星；単位：日数

惑星の公転半径；K；軌道の長半径；km

仮想フラフープの半径； $H \approx K/2$ ；km

仮想フラフープの公転周期；A；対恒星；日数

仮想フラフープの公転周期；B；対惑星；日数

仮想フラフープの自転周期；X；対恒星；日数

仮想フラフープの自転周期；W；対惑星；日数

惑星の自転周期；D；対恒星；単位：日数

惑星の自転周期；B；対衛星；単位：日数

惑星の赤道半径；R；Radius；単位：km

衛星の赤道半径；r；radius；単位：km

衛星の公転周期；M；対恒星；単位：日数

衛星の公転半径；K；軌道の長半径；km

仮想フラフープの半径； $H \approx K/2$ ；km

仮想フラフープの公転周期；D；対恒星；日数

仮想フラフープの公転周期；B；対衛星；日数

仮想フラフープの自転周期；X；対恒星；日数

仮想フラフープの自転周期；W；対衛星；日数

5. 考察

HH（フラフープ）数理モデルは、太陽の自転周期を持たむ事により、惑星の公転周期の共鳴関係を明らかにする事が可能になる。（比較される数値の大きさのオーダーが合う。）

太陽の周りを公転している惑星、準惑星、等は太陽の引力圏内に居る限り、太陽の自転による引力の「ゆらぎ」の影響を受ける筈である。その比率は太陽の引力圏内に於いては、何処でも同じ比率であろう。

地球・月系、冥王星・カロン系、等のバイナリ天体では、太陽の自転周期に起因する引力の「ゆらぎ」に共鳴し易いのではないだろうか。

月の公転＝自転周期と太陽の重力的自転周期との同期。カロンの公転＝自転周期は、1 : 4 で同期している。この場合、最小二乗法により、太陽の重力的自転周期＝25.54 日を想定してみたい。

太陽の重力的自転周期＝25.54 日とすると、太陽の赤道付近の自転周期＝25.38 日と「うなり」を生ずるのであろう。両周期の差は、0.16 日である。

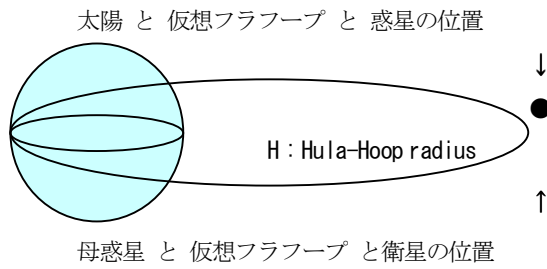
「うなり」の周期は、4051.28 日＝11.0918 年に成って、これは、太陽黒点の極大極小周期に一致している。

6. おわりに（逆問題）

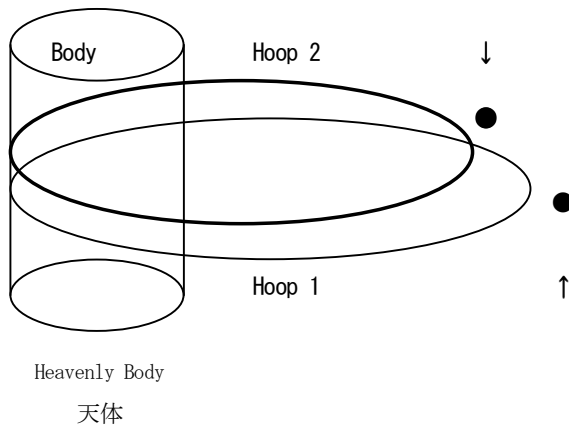
ケプラーの第三法則（1619年）の68年後に、ニュートンの万有引力の法則（1687年）が出た。

ウェーゲナーの大陸移動説（1912年～）は50年経って、プレートテクトニクスとして立証された。

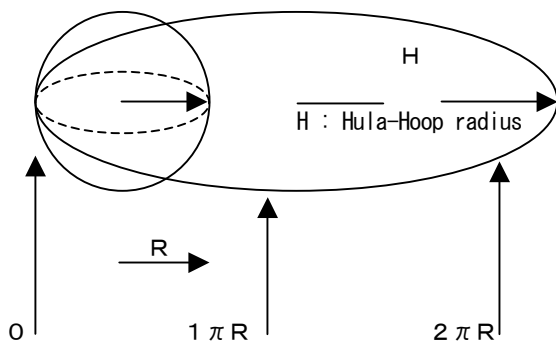
チチウス・ボーデの法則は、単なる経験則に過ぎないのだろうか。



共鳴関係が成立つ為には、フラフープの「自転周期」が相互に「共鳴関係」になっているのではないだろうか。



仮想フラフープの半径は H 、直径は K である。
 (直径 K は、公転軌道の半長径を使用している)
 R は母天体の赤道半径、 r は子天体の赤道半径。



天体とフラフープの接点は、回転と共に移動している。
 出発の0点に戻るまでの回転を、「フラフープ自転」、
 振り回される回転を、「フラフープ公転」と定義する。

(図1. 仮想フラフープ数理モデルの概念図)

| N | 周波数 | 倍率 | 比率 | 音名 |
|-----|---------|--------|---------|-----|
| 24 | 1760 Hz | 4 | 4 : 1 | A6 |
| 23 | 1661.21 | 3.7754 | 15 : 4 | G#6 |
| 22 | 1567.98 | 3.5635 | 18 : 5 | G6 |
| 21 | 1479.97 | 3.3635 | 10 : 3 | F#6 |
| 20 | 1396.91 | 3.1748 | 16 : 5 | F6 |
| 19 | 1318.51 | 2.9966 | 3 : 1 | E6 |
| 18 | 1244.50 | 2.8284 | 14 : 5 | D#6 |
| 17 | 1174.65 | 2.6696 | 8 : 3 | D6 |
| 16 | 1108.73 | 2.5198 | 5 : 2 | C#6 |
| 15 | 1046.50 | 2.3784 | 12 : 5 | C6 |
| 14 | 987.766 | 2.2449 | 9 : 4 | B5 |
| 13 | 932.327 | 2.1189 | 17 : 8 | A#5 |
| 12 | 880 Hz | 2 | 2 : 1 | A5 |
| 11 | 830.60 | 1.8877 | 15 : 8 | G#5 |
| 10 | 783.99 | 1.7817 | 9 : 5 | G5 |
| 9 | 739.98 | 1.6817 | 5 : 3 | F#5 |
| 8 | 698.45 | 1.5874 | 8 : 5 | F5 |
| 7 | 659.25 | 1.4983 | 3 : 2 | E5 |
| 6 | 622.25 | 1.4142 | 7 : 5 | D#5 |
| 5 | 587.32 | 1.3348 | 4 : 3 | D5 |
| 4 | 554.36 | 1.2599 | 5 : 4 | C#5 |
| 3 | 523.25 | 1.1892 | 6 : 5 | C5 |
| 2 | 493.88 | 1.1224 | 9 : 8 | B4 |
| 1 | 466.16 | 1.0594 | 16 : 15 | A#4 |
| 0 | 440 Hz | 1 | 1 : 1 | A4 |
| -1 | 415.30 | 0.9438 | 15 : 16 | G#4 |
| -2 | 391.99 | 0.8908 | 8 : 9 | G4 |
| -3 | 369.99 | 0.8408 | 5 : 6 | F#4 |
| -4 | 349.22 | 0.7937 | 4 : 5 | F4 |
| -5 | 329.62 | 0.7491 | 3 : 4 | E4 |
| -6 | 311.12 | 0.7071 | 5 : 7 | D#4 |
| -7 | 293.66 | 0.6674 | 2 : 3 | D4 |
| -8 | 277.18 | 0.6299 | 5 : 8 | C#4 |
| -9 | 261.62 | 0.5946 | 3 : 5 | C4 |
| -10 | 246.94 | 0.5612 | 5 : 9 | B3 |
| -11 | 233.08 | 0.5297 | 8 : 15 | A#3 |
| -12 | 220 Hz | 0.5 | 1 : 2 | A3 |

(表1. 半音階 (N) の共鳴関係)

参考文献

- [1] 理科年表 東京天文台編 第81冊 平成20年版 発行所 丸善株式会社
- [2] 天文年鑑 2008年版 発行所 誠文堂新光社

(表3.) 自転(自) 公転(公) 周期 [1] [2]

| 天体名 | 音階名 | | 日数 | 年数 |
|-----|-------|---|---------|--------|
| 太陽 | A-26 | 自 | 25.38 | 0.069 |
| 水星 | C-27 | 公 | 87.97 | 0.24 |
| 金星 | G-29 | 公 | 224.70 | 0.61 |
| 地球 | B-30 | 公 | 365.25 | 1.00 |
| 火星 | C-30 | 公 | 686.98 | 1.88 |
| 木星 | E-33 | 公 | 4,332 | 11.86 |
| 土星 | C-34 | 公 | 10,786 | 29.53 |
| 天王星 | F#-36 | 公 | 30,733 | 84.25 |
| 海王星 | F#-37 | 公 | 60,349 | 165.22 |
| 冥王星 | B-38 | 公 | 90,817 | 248.64 |
| エリス | A-39 | 公 | 203,430 | 556.97 |

(表4.) 自転(自) 公転(公) 周期

| 天体名 | 音階名 | | 日数 |
|-----|-------|---|--------|
| 太陽 | A-26 | 自 | 25.38 |
| 水星 | G-27 | 自 | 58.65 |
| 金星 | F#-29 | 自 | 243.0 |
| 地球 | F-21 | 自 | 0.997 |
| 火星 | E-21 | 自 | 1.026 |
| 木星 | G#-20 | 自 | 0.4135 |
| 土星 | G-20 | 自 | 0.4440 |
| 天王星 | B-21 | 自 | 0.7183 |
| 海王星 | C-20 | 自 | 0.6713 |
| 冥王星 | A-24 | 自 | 6.3872 |
| 月 | G#-26 | 公 | 27.32 |

太陽系での共鳴 (Resonance) 関係, 協和音 (Concord) の例

地球の「月」の「自転と公転の関係」は、1:1 である。G#-26, 同音(Unison), 27.32 日
 水星の「自転と公転の関係」は、2:3 になっている。G-27 : C-27, 58.6462 日 : 87.9730 日
 木星と土星の公転周期の関係は、2:5 になっている。E-33 : C-34, 11.86 年 : 29.53 年
 天王星,海王星,冥王星の公転は、1:2:3 である。F#-36 : F#-37 : B-38, 84.25 : 165.22 : 248.64 (年)
 冥王星と衛星の自転,公転,自転は、1:1:1 である。A-24, 6.38725 日, 同音(Unison)

太陽系での不協和音 (Discord) の例

金星の「自転と公転の関係」は半音階的な差異。F#-29 : G-29, 243.0 : 224.7 (日)
 地球の自転と火星の自転の関係は半音階的差異。F-21 : E-21, 24 : 24.7 (時間)
 木星の自転と土星の自転の関係は半音階的差異。G-20 : G#-20, 0.414 : 0.444 (日)
 天王星の自転と海王星の自転の関係も半音階的。B-21 : C-20, 0.7183 : 0.6713 (日)

周期(時間)と周波数(Hz)の関係は回転体の回転速度に関係しているが、その回転方向(順行/逆行,正転/逆転), 回転の傾斜角(Inclination)や、離心率(Eccentricity)からは独立である。

内惑星の協和音は、イ短調 (A minor) である。外惑星の協和音は、ト長調 (G major) である。
 どちらの調で歌うのかを迷っている合唱隊が、小惑星 (Minor Planets/Asteroids) ではないだろうか。
 木星, 土星, 天王星, 海王星, 等の大型ガス惑星の環(Ring)も同様の存在ではないだろうか。
 木星の大型の4衛星は、協和音を奏でている。惑星の環(Ring)の幅は、狭い形で存在している。
 土星の大型の4衛星は、不協和音を奏でている。惑星の環(Ring)の幅は、広い形で存在している。

7. 謝辞

ご指導を頂いた慶應義塾大学 理工学部 物理情報工学科の田中敏幸研究室の皆様にご感謝します。